

『三国遺事』によって作られた古代史

—中等教育教科書を中心に—

朴正義*

(e-mail : kannan322@hotmail.com)

目次

1. はじめに
 2. 『高等学校 国史』
 3. 『中学校 国史』
 4. おわりに
-

1. はじめに

論を展開する前に、本論文が、『日本文化学報』24輯に発表した論文「韓国中等教科書に見られる『三国遺事』の史実化」の再考であることを、最初に明らかにするものである。前論文は問題提起だけに終わったが、本論文はそれを発展させ、『三国遺事』を基にして組み立てられた教科書の古代史の間違いを具体的に指摘した。

過去において日本では、神武天皇を出発点とする皇国史観で持つて自国の古代史を組み立てていたが、敗戦後それに対する反省から新に古代史の組み立てが行われてきた。しかし、最近になり扶桑社の『新しい歴史教科書』に見られるように、皇国史観の復活が企てられている。これに対し断続的な批判を加えていかなければならないのは当然である。ならば、韓国の歴史教科書『国史』はどうか。『国史』も、『新しい歴史教科書』と同じく「悠久の歴史を持つ単一民族国家」と自国の歴史を規定し、そして、それを保障するものとして『三国遺事』が存在する。『新しい歴史教科書』を批判すると同時に、現在の韓国教科書の古代史見直しをしなければならない。そうすることによって、日本の皇国史観の復活に対して批判を加えることができるのではないだろうか。そのような意味で、この論文

* 圓光大學校 日語教育科 教授 日本學

を作成した。

韓国において、檀君を民族の祖として一つの民族の歴史が語られ続けてきた。その結果、歴史教科書『高等学校 国史』に「悠久の歴史を持つ単一民族国家」と自国の歴史を規定し、これが現在の国民の歴史観として定着している。この根拠の核心が『三国遺事』檀君神話である。

しかし、『三国遺事』テキストに則して読んでいけば、高句麗・百済・新羅の三国の始祖伝説はそれぞれ独立した神話として成立しており、特に南北は別個の歴史を持ち発展したと語っている。さらに重要なのは、檀君と三国の始祖が系譜として繋がっていないことである。つまり、『三国遺事』からは一つ民族の答えは得られない。即ち、「『三国遺事』檀君による一つの民族」は擬制でしかなく、それを根拠とする「悠久の歴史をもつ単一民族国家」は正されなければならない。では、何故このようなことが今も語り続けられているのか。

朝鮮時代末期を迎え、開化と同時に日本からの圧迫に対抗するように民族主義的歴史学が台頭した。教科書を中心とした当時の歴史叙述は、愛国主義・民族主義・独立主義の意識が強く反映され、1)そこに檀君を韓国史始初に登場させ、建国と民族の始祖として叙述した。ここに、民族意識を高揚すると同時に、朝鮮が檀君以来の悠久の歴史と伝統を持つという韓国史像が構成された。2)

これに対し日本政府は植民化政策の一貫として、韓民族の独立の象徴であった「檀君」の抹殺を図った。このため、檀君意識は独立運動と絡みさらに強く現れ、民族の祖檀君が国民の総意のもとに登場したのである。この時期、檀君の根拠として日本人の学者が否定した『三国遺事』が再登場した。

韓国では、日本政府主導の檀君神話研究は植民地史観であるとし、これに対抗するように、『三国遺事』檀君の史実化への研究が民族史学者を中心としてなされた。彼らは武力行動は起こさなかったが、檀君神話研究を通して民族運動を展開した者たちと言える。3)当時の民族史学者たちは檀君神話を守り発展させることによって、民族の自尊心を回復させ自主独立の正統性をそこに見つけようとした。即ち、檀君を単に古朝鮮の祖として終わらせず、全韓民族の祖として独立の象徴として昇華させた。檀君は独立運動と共にイデオロギー化したのである。そして、この植民地時代に作られたイデオロギーが、独立後も「檀君」を規制した。

日本からの解放そして大韓民国樹立とともに、「檀君」が自主独立・民族性の回復の象徴、民族の精神的支柱として考える風潮がますます高まり、檀君は偉大な民族の祖とし

1)李弼泳「檀君研究史」『檀君—その理解と材料』ソウル大學校出版部 1994年10月 p.84

2)鄭昌烈「韓末の歴史認識」『韓國史學史の研究』乙酉文化社1985年 p.215

3)李載杰「檀君神話研究の現況と問題点」(李恩峰『檀君神話研究』オンヌリ(온누리)1986年3月 p.321)

て、その教え・理念が現在に至るとまで伝えられた。まさに民族の自主独立の象徴として認識されたといえる。

問題は、このイデオロギー化した民族の祖「檀君」が、今も歴史教科書に生き、「悠久の歴史をもつ単一民族国家」という国民国家観的歴史を作り出し、現在の国民の歴史観として定着しているということである。ここに、一つの民族を語らない『三国遺事』檀君神話によって、「一つの民族」が語られていることに疑問を呈する必要がある。

2. 『高等学校 国史』

韓国の高校の歴史教科書は、韓国の国史編纂委員会・国定図書編纂委員会によって編纂された国定教科書『高等学校 国史』⁴⁾だけである。この第一章「韓国史の正しい理解」2条「韓国史と世界史」の最初の項「韓国史の普遍性と特殊性」において、

我が民族は半万年以上の悠久の歴史をもっており、世界史においても稀れに見る単一民族国家として伝統を受け継いできた⁵⁾

と、最初に指摘したように韓国の歴史を「悠久の歴史をもつ単一民族国家」と最初に規定する。これが、教科書が語る韓国の歴史であり、最後までこの歴史観が貫かれている。

まず、第2章の第1条「先史時代の展開」で韓国民族のはじまりと形成過程を語り、第2条「国家の形成」で国の始まりと形成過程を説く。第2条の最初の項目「1. 古朝鮮と青銅器文化」で、青銅器・鉄器文化の発展を記述した後、朝鮮半島における国の始まり、即ち韓民族最初の国家として檀君朝鮮の形成過程を記す。

【檀君と古朝鮮】

青銅器文化の発展にあわせ族長が支配する社会が出現した。この中でも強力な族長は周辺部族を統合しながら、徐々に族長の権力を強化していった。

部族社会において最初に国家として発達したのが古朝鮮であった。『三国遺事』の記録によれば、古朝鮮は檀君王儉が建国したという(B.C.2333)。檀君王儉は当時の支配者の称号であった。

4) 国史編纂委員会・国定圖書編纂委員会(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部科學省)

5) 「우리 민족은 만만년 이상의 유구한 역사를 가지고 있고, 세계사에서 보기 드문 단일 민족 국가로서의 전통을 이어 오고 있다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部科學省) p.13)

古朝鮮は遼寧地方を中心に成長し徐々に周辺部族を統合しながら朝鮮半島にまで発展したが、このような事実は琵琶型の銅剣とコインドルの出土分布から知ることができる。

古朝鮮の勢力範囲は青銅器時代を特徴づける遺物の一つである琵琶型の銅剣とコインドルが出る地域と深い関係がある。6)

これが、教科書本文の「檀君の古朝鮮建国」の内容である。まず、「部族社会において最初に国家として発達したのが古朝鮮であった」と、古朝鮮の存在を史実として確認することからはじまる。この証拠として、「三国遺事の記録によれば、檀君王儉が建国したという(B.C.2333年)」と、『三国遺事』をあげることができる。さらに、古朝鮮の存在の根拠として、考古学資料である琵琶型の銅剣とコインドルをあげている。7)

ここで、檀君建国紀元前2333年というのは、『三国遺事』でなく『東國通鑑』8)によって編者の史論を通して示されたものである。「外紀」に次のようにある。

[臣等按]《古紀》云：「檀君與堯併立於戊辰。歷虞、夏至商、武丁八年乙未、入阿斯達山爲神。享壽千四十八年」。此說可疑。今按。堯之立在上元甲子甲辰之歲。而檀君之立在此後二十五年戊辰。則曰與堯併立者非也。

(現代語訳)臣が考えるに、『古紀』云うに「檀君は堯王と同じく戊辰年に即位し、夏と商の時代を経て武丁八年乙未に阿斯達山に入り神となった。享寿1048年である」。この説は疑わしい。今考えるに、堯王が即位したのは上元甲子の甲辰年の時で、檀君が即位するのはその後25年の戊辰で、則ち堯王と一緒に即位したのではない。

6) 「청동기 문화의 발전과 함께 족장이 지배하는 사회가 출현하였다. 이들 중에서 강한 족장은 주변의 여러 족장 사회를 통합하면서 점차 권력을 강화해갔다.

족장 사회에서 가장 먼저 국가로 발전한 것은 고조선이었다. 삼국유사의 기록에 따르면 고조선은 단군 왕검이 건국하였다고 한다(B.C. 2333). 단군 왕검은 당시 지배자의 칭호였다.

고조선은 요령지방을 중심으로 성장하여 점차 인접한 족장 사회들을 통합하면서 한반도까지 발전하였는데, 이와 같은 사실은 비파형 동검과 고인돌의 출토 분포로써 알 수 있다. 고조선의 세력 범위는 청동기 시대를 특징짓는 유물의 하나인 비파형 동검과 고인돌이 나오는 지역과 깊은 관계가 있다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部科學省) 2004年3月(2002年3月) p.p.34~35)

7)これに関して、金貞培氏は「琵琶型銅剣は紀元前10世紀前後の貴重な遺物で、時期的にみれば濊貊朝鮮に該当する。琵琶型を必要以上に古朝鮮文化だけに限定する場合、代表性のある文化としての面から理解できるが、反対に文の示す古い歴史の上限線を破る弱点もある」(金貞培「培」「琵琶型銅剣の問題」『南北學者たちが一緒に書いた檀君と古朝鮮研究』(檀君學會編) 知識産業社 2005年 10月 p.34)、さらに安鎬晟氏は、「檀君の君學會をB.C.2333年としながら、古朝鮮時代を青銅器時代とする合、矛盾がある」(安鎬晟氏『檀君一創られた神話』図書出版山2002年1月 p.306)と指摘した。考古學的に琵琶型銅剣はB.C.9~8世紀のものとしており(李基東・李基白『韓國史講座1 古代篇』一潮閣 2001年3月(1982年8月) p.p.26~27)、教科書が『三国遺事』を引用して古朝鮮建國をB.C.2333年とするのとは年代的に隔たりがあり、琵琶型の銅剣が『三国遺事』古朝鮮の記事の裏付けとはならない。

8)『東國通鑑・外紀』檀君朝鮮

『東国通鑑』は堯元年を戊辰年と見ず、甲辰年とみた。9) そうなれば檀君元年戊辰は堯25年になる。以後の朝鮮時代では檀君元年 = 堯25年戊辰説が通説となった。現在韓国で採用されている檀紀元年 = B.C.2333年は、この『東国通鑑』の年代算定法を基にしたものである。

続いて、

古朝鮮の建国事実を伝える檀君の話は、我が民族の始祖として広く伝えられてきた。檀君の話は永い歳月にわたり伝承された記録として残されてきた。その間、ある要素は後代に新しく付け加えられもし、時には削除された。

神話はその時代の人々が関心を持つものが反映されたもので、歴史的意味が含まれている。これはすべての神話に共通する属性である。檀君の記録も同じく、青銅器時代を背景にした古朝鮮の成立を歴史的事実として反映している。10)

「古朝鮮の建国事実を伝える檀君の話は我が民族の始祖として広く伝えられてきた」で「檀君神話」とせず「檀君の話」とするのは、「神話の代りに話という用語を使用するのは檀君神話を神話として見るのではなく、檀君建国の事実性を示すためだ」11)と宋ホンジャ氏が指摘するように、檀君を史実とみようとするためである。これは、教科書は「ある要素は後代に新しく付け加えられもし、時には削除された」と、檀君の古朝鮮建国の話が伝承の過程において変形されたこと認めながらも最後に、「古朝鮮の建国事実を伝える檀君の話は我が民族の始祖として広く伝えられてきた。檀君の話は永い歳月にわたり伝承された記録として残されてきた」と、その骨格となる話が史実であると再確認することからも分かる。

さらに、これらが神話であることを意識し、神話が歴史を反映するという一般的な属性を述べた後、「檀君の記録も同じく、青銅器時代を背景にした古朝鮮の成立を歴史的事実として反映している」と、やはり檀君の古朝鮮建国を史実として今一度確認する。このように檀君神話が史実として教科書に記されていることが分かる。そして、これらは、教育人的

9) 堯元年甲辰説は、西晋 皇甫謐の『帝王世紀』や宗 邵雍(1011~1077)の『皇極経世書』などから根拠した。

10) 「고조선의 건국 사실을 전하는 단군 이야기는 우리 민족의 시조 신화로 널리 알려져 있다. 단군 이야기는 오랜 세월을 거치면서 전승되어 기록으로 남겨진 것이다. 그러는 사이에 어떤 요소는 후대로 가면서 새로 첨가되기도 하고 때로는 없어지기도 하였다.

신화는 그 시대 사람들의 관심이 반영되는 것으로 역사적인 의미가 담겨 있다. 이것은 모든 신화에 공통되는 속성이기도 하다. 단군의 기록도 마찬가지로 청동기 시대의 문화를 배경으로 한 고조선 일 성립이라는 역사적 사실을 반영하고 있다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部科學省) p.p.34~35)

11) 宋ホジョン(호정)『檀君 作られた神話』図書出版サンチョロム(산처림) 2002年1月 p. 212

資源部(文部科学省)から出された『高等学校教師用指導書 国史』に、歴史として檀君を教えるよう明記していることから分かる。¹²⁾

さらに本文は続き、

この時、桓雄部族は太伯山の神市を中心に勢力を伸ばし、彼らは天の子孫であることを唱え自分達の部族の優越性を誇示した。また、風伯・雨師・雲師をおき、風・雨・雲など農耕に関係することを主管させた¹³⁾。

とある。これは、『三国遺事』古朝鮮条

『三国遺事』古朝鮮条：雄率徒三千降於太伯山頂即太伯山今妙香山神壇樹下。謂之神市。是謂桓雄天王也。將風伯雨師雲師。而主穀主命主病主刑主善惡。¹⁴⁾
(現代語訳)桓雄は部下三千を率いて太伯山の頂上の神壇樹の下に降りてきて、そこを神市と呼んだ。この方を桓雄天王という。桓雄は風伯・雨師・雲師らを従え、穀命病刑善惡をつかさどり、あらゆる人間のことがらを治め教化した。

という神話部分の歴史的解釈である。ただ、ここで注目すべきは、教科書に「桓雄部族は太伯山の神市を中心に勢力を伸ばし」と、檀君の父の名であるはずの「桓雄」を、檀君の出身部族の名称としている。

また、本文の横にある注釈に「檀君の古朝鮮建国に関する記録は三国遺事・帝王韻紀・東国輿地勝覧などに記載されている¹⁵⁾」とある。つまり、『三国遺事』だけでなく、『帝王韻紀』『東国輿地勝覧』も参考にして、檀君の古朝鮮建国が『高等学校 国史』に記載されたことを暗示している。

12) 第2章韓「國史研究の動向」第1條「先史時代の文化と國家の形成」第4項「國家の形成と文化」
「족장 사회가 출현하면 세력이 강한 족장은 주변의 여러 사회를 통합하고 점차 국가로 발전시켜 나아간다. 고조선은 단군왕검에 의해서 건국되었다(기원전 2333년:族長社會が出現し、勢力がある族長は周辺の社會を統合し、徐々に國家として發展した。古朝鮮は檀君王儉によって建國された。(紀元前2333年)」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會編「高等學校教師用指導書 國史」 教育人的資源部(文部科学省) 2007年3月(2002年3月) p.78)

13) 「이때 환웅 부족은 태백산의 신시를 중심으로 세력을 이루었고, 이들은 하늘의 자손임을 내세워 자기 부족의 우월성을 과시하였다. 또 풍백, 우사, 운사를 두어 바람, 비, 구름 등 농경에 관계되는 것을 주관하게 하였다.」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部省)p.35)

14) 『三國遺事』卷第一 紀異第一 古朝鮮條

15) 「(단군의 고조선 건국) 단국의 건국에 관한 기록은 삼국유사 제왕운기 동국여지승람 등에 나타나고 있다」 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部省)p.3

しかし、『帝王韻紀』16)に記載された檀君の朝鮮建国の記事の内容をみれば、まず「初誰開國啓雲釋帝之孫名檀君：最初に誰が国を開いたのだろうか。釈帝の孫で、その名は檀君だ17)」で始まり、檀君について「本紀」を引用し、

『帝王韻紀』：本紀曰。上帝桓因有庶子。曰雄。云云。謂曰。下至三危太白。弘益人間歟。故雄受天符印三箇。率鬼三千而太白山頂神檀樹下。是謂檀雄天王。云云。令孫女飲藥成人身 与檀樹神婚生男名檀君。18)
(現代語訳)「本紀」に曰く、上帝桓因に庶子があり、名を雄という。云々。(桓因がその子に)曰く「地上の三危太白に降りて行き、人間を広く利せよ」。そこで(桓)雄は天符印三箇を承け、鬼三千を率いて、太白山頂の神檀樹の下に降りた。この方が檀雄天王である。云云。孫女に薬を飲ませ成人の身にし、檀樹神と結婚させ男を生せた。名は檀君である。

と記している。この内容は『三国遺事』の記事と酷似するが、二つの点で大きく異なる。まず『三国遺事』では桓雄自身の意志で降る19)のに反し、『帝王韻紀』では桓雄自身の意志は示されていない。教科書ではこの点を明確に示さない。教科書にとって重要なのは、本文に記載した「彼らは天の子孫であることを唱え、自分達の部族の優越性を誇示した」20)、即ち天の子孫であることである。このため、一つ目の違いは教科書においては問題とならない。

しかし、檀君の誕生について、『三国遺事』と『帝王韻紀』とでは、次のように異なる。

○『三国遺事』：時有一熊一虎。同穴而居。常祈于神雄。願化為人。(略)熊得女身。虎不能忌。而不得人身。熊女者無与為婚。故每於壇樹下。呪願有孕。

16)『帝王韻紀』は、高麗の忠烈王13年(1287)李承休が64才の時三陟頭陀山に隠居しながら著述した叙事詩である。『三国遺事』の1281年とほぼ同じ時期に書かれたものである。そして、1295年または1296年發刊され流布されたが、恭愍王の時(1360)再刊、朝鮮時代の太宗17年(1417)に三刊された。この本は上下二巻に分かれ、上巻では中國の盤古から金までの歴史的事實を七言詩で詠い、下巻では韓國の歴史を部に分けて詠っており、部「東國君王開國年代」は檀君から後高句麗までの歴史的事實を七言詩で詠い、部「本朝君王世系年代」では高麗始祖から忠烈王までの歴史的事實を五言詩で詠っている。特に、下巻の檀君に関する記録は、『三国遺事』の檀君記事とともにもっとも古いものである。(金慶洙譯(1999)『帝王韻紀』図書出版)

17)『帝王韻紀』下巻 東國君王開國年代 (金慶洙譯(1999)『帝王韻紀』図書出版 p.136)

18)『帝王韻紀』下巻 東國君王開國年代 (金慶洙譯(1999)『帝王韻紀』図書出版 p.136)

19)『三国遺事』卷第一 紀異第一 古朝鮮条「昔有桓因謂帝釈也庶子桓雄。数意天下。貪求人世。父知子意」とあるように、『三国遺事』では桓雄が元々天下に意を持っており、これをした父桓因が地上に桓雄を送る。

20)「이들은 하늘의 자손임을 내세워 자기 부족의 우월성을 과시하였다.」 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部省)p.35

雄乃假化而婚之。孕生子。号曰檀君王儉。21)

(現代語訳)時に一頭の熊と一頭の虎とが同じ穴に住んでいて、いつも神雄(桓雄)に人間に成りたいと願い祈って、(略)熊は(変じて)女の身を得たが、虎は物忌みができず人の身を得ることができなかった。熊女は彼女と結婚してくれる者がいなかったの、いつも(神)檀樹の下で、身籠りますようと祈った。桓雄がしばらく身を変えて(人間となって)結婚して子を孕み生んだ。名前を檀君王儉と云う。

○『帝王韻紀』：令孫女飲藥成人身。与檀樹神婚生男。名檀君。據朝鮮之域爲王。22)
(現代語訳)孫女に薬を飲ませ成人の身にし、檀樹神と結婚させ男を生せた。名は檀君である。朝鮮の領域を占め王となった。

この部分を教科書では、

桓雄の部族は周囲の他の部族を統合していった。熊を崇拜する部族は桓雄の部族と連合し古朝鮮を形成したが、虎を崇拜する部族は連合から排斥した。23)

とする。『三国遺事』檀君のトーテム的解釈により、『帝王韻紀』の記事は無視されている。24)

次にもう一つ教科書にあげられた参考文献として『東国輿地勝覧』がある。これは朝鮮時代初期に書かれた地理書であるが、そこには同時に各地の歴史も記載されている。現在残っているのは、改修増補した『新增東国輿地勝覧』である25)。ここに、檀君に関する

21) 『三國遺事』卷第一 紀異第一 古朝鮮條 「時有一熊一虎。同穴而居。常祈于神雄。時神遣靈艾一炷蒜二十枚曰。爾輩食之。不見日光百日。便得人形。熊虎得而食之忌三十七日。熊得女身。虎不能忌。而不得人身。熊女者無與爲婚。故每於檀樹下。呪願有孕。雄乃假化婚之。孕生子。號曰檀君王儉」

22) 『帝王韻紀』下卷 東國君王開國年代 (金慶洙譯(1999)『帝王韻紀』図書出版 p.136)

23) 「 환웅 부족은 주위의 다른 부족을 통합하고 지배해 갔다. 곰을 숭배하는 부족은 환웅 부족과 연합하여 고조선을 형성하였으나 호랑이를 숭배하는 부족은 연합에서 배제되었다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」教育人的資源部(文部省)p.35)

24) 教科書の檀君の誕生部分は、崔南善が「この時一番有力な王族が熊虎トーテムで、扶余帝国の王族が熊のトーテムだ」(崔南善「檀君及其研究」民族文化論叢 第一冊 民族文化社 1981年 p.p.156~159)、李丙寿が「桓雄説話は天神族説で、檀君誕生は天地兩神族説として熊女はコマ族の熊トーテムの女性。従って太陽トーテムの天神族桓雄と熊トーテムの地神族熊女との間に檀君が誕生したことを説話化したものだ」(李丙寿『韓国古代史研究』博英社 1979年 p.p.23~27)、そして金貞培が「韓国の新石器文化を残した住民は古アジア族であるが、彼らは韓民族の種族である濊貊で、アルタイ系譜でない。檀君神話はこれらの歴史的事実として、これらが次に来るアルタイ民族に征服吸収された事実が『檀君神話』として歴史的潤色されたものだ」(『檀君神話研究の現況と問題点』『檀君神話研究』 온누리(オンヌリ) 1986年 p.342)と解いた。

25) 朝鮮王朝九代成宗(在位1469—1494)の命により盧思慎等が編纂した全55巻22冊からなる朝鮮の地理書で、1481年に『輿地勝覧』として50巻完成。1486年にこれを訂正し『東国輿地勝覧』という名で35巻発刊。1499年改

る記事をあげると、次のようになる。

- ・**卷1 都上**：檀君堯帝甲辰年開國。予此後入九月山。不知所終。²⁶⁾
(現代語訳)檀君は堯帝甲辰年に国を建てた。その後九月山に入ったが、その終りは分からない。
- ・**卷42 文化縣**：檀君初都平壤。後又移白岳即此山也。至周武王封箕子於朝鮮。檀君乃移於唐藏京。後還此山。化爲神。²⁷⁾
(現代語訳)檀君が初めに平壤を都とし、後にまた白岳に移るが、即ちこの山だ。周に至り武王が箕子を朝鮮に封じると、檀君は唐藏京に都を移したが、またこの山に還り隠れ、神となった。
- ・**卷51 平壤府**：本三朝鮮高句麗之故都。唐堯戊辰歲有神人降太伯山檀木下國人立爲君都平壤。號檀君。是爲前朝鮮。²⁸⁾(現代語訳)本来三朝鮮と高句麗の昔の都。唐堯戊辰年に神人あり太伯山檀木の下に降りてきたのを国の人々は王とし平壤を都とした。檀君と名付けた。これが前朝鮮を為す。

多くの檀君記事が載せられているが、教科書が『東國輿地勝覽』を参照した跡は見られない。即ち、教科書の本文の横の注に「檀君の古朝鮮建国に関する記録は三国遺事・帝王韻紀・東國輿地勝覽などに記載されている」と、いかにも三書を引用したように書かれているが、教科書そのものの内容は『三国遺事』の記事だけで構成されているのである。『高等学校 国史』における檀君の古朝鮮建国の記事の根拠はどこまでも『三国遺事』である。しかも、作り直された解釈によって再創造された『三国遺事』である。

次に、第2章1条の「2. 我が国の先史時代」に、東アジアの文化圏を北方文化圏(북방문화권)、漢族文化圏(한족문화권)、華南文化圏(화남문화권)と、東方文化圏(동방문화권)の四つに分けた地図が載せられている(図1参照)²⁹⁾。

修。1530年李荇等が新增し『新東國輿地勝覽』として刊行。内容は京畿以下各道の沿革風俗廟社陵寢宮闕官府学校土産の種類と、孝子烈女の行状と城郭(廓)山川楼亭寺社驛院橋梁の位置名賢の社稷詩人の題詠まで載せた。1-2巻京都、3巻漢城、4-5巻開成、6-13巻京畿、14-20巻忠清、21-32巻慶尚、33-40巻全羅、41-43巻黄海、44-47巻江原、48-50巻咸鏡、51-55巻平安に分かれている。

26) 『東國輿地勝覽』 卷之一 京都上(民族文化推進篇(1996) 『新增東國輿地勝覽』 舎出版社)

27) 『東國輿地勝覽』 卷之四十二 文化縣(民族文化推進篇(1996) 『新增東國輿地勝覽』 舎出版社)

28) 『東國輿地勝覽』 卷之五十一 平壤府(民族文化推進篇(1996) 『新增東國輿地勝覽』 舎出版社)

29) 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等学校 国史」 教育人的資源部(文部科學省) p.21

【図1 先史時代の文化圏】



この地図のなかで注目したいのは東方文化圏(동방문화권)である。ここに中国とは別な文化をもつ檀君の古朝鮮を示している。それは、『三国遺事』の古朝鮮条にある

『三国遺事』古朝鮮条：以唐高(堯)即位五十年庚寅。(略)都平壤城[今西京]。始稍朝鮮。³⁰⁾

(現代語訳)(檀君王儉は)、唐堯帝が即位してから50年たった庚寅。(略)平壤を都とし、始めて朝鮮と称した。

という記事による。つまり、檀君朝鮮は、中国とほぼ同時期に建国されたことから、当然中国の影響を受けない独自の文化圏を形成していたと確信する。

さらに、この地図は、第1章「韓国史の正しい理解」第2条「韓国史と世界史」の最初の項「韓国史の普遍性と特殊性」にある

世界をいくつかの文化圏に分けてその特殊性を理解することにし、一つの文化圏の中でもう一度民族文化や地方文化の特殊性を抽出することにする。すべての民族の歴史には、このような普遍性と特殊性が存在する³¹⁾

という記事を、視覚的に納得させるものである。

30) 『三国遺事』卷一 紀異第一 古朝鮮條

31) 「세계를 몇 개의 문화권으로 나누어 그 특수성을 이해하기도 하고, 하나의 문화권 안에서도 다시 민족 문화나 지방 문화의 특수성을 추출하기도 한다. 모든 민족의 역사에는 이러한 보편성과 특수성이 함께 존재한다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部科學省) p.13)

さらに、「韓国史の普遍性と特殊性」の次の項目「民族文化の理解」において、次の記事が『高等学校 国史』本文にある。

我が祖先は、悠久の歴史を経ながら、知恵を働かせまた努力することによって文化を発展させてきた。我が文化は、他のどの民族とも区別される特殊性を持ちながら、普遍的価値を追求してきた文化である。

先史時代には、アジアの北方文化と連繫した文化を達成し、その後中国と深い関係を持ちながら独創的な古代文化を発展させた。³²⁾

このように、韓国の文化の独創性を『高等学校 国史』は強調する。

さらに、第1章の最後に記載されている「深化課程」に「民族主義」の記事がある。

民族主義は、一般的に民族の生活・伝統・文化を保存し国民国家を形成し、国家の成立後にはその独立性と統一性を発展させる思想や行動をいう³³⁾。

ここに、『高等学校 国史』の意図する歴史観、「悠久の歴史をもつ単一民族国家」という国民国家観が完成する。これは、韓民族最初の国家として檀君朝鮮が中国と同時期に始まることによって始めて可能となる。そして、教科書のこれら全てを保障するのが『三国遺事』なのである。しかし、『三国遺事』テキスト本来の意味は、仏教の普遍的世界の中での檀君朝鮮の建国を語るもので、明らかに『高等学校 国史』とは異なる。

この事情は、『中学校 国史』においても同じである。

3. 『中学校 国史』

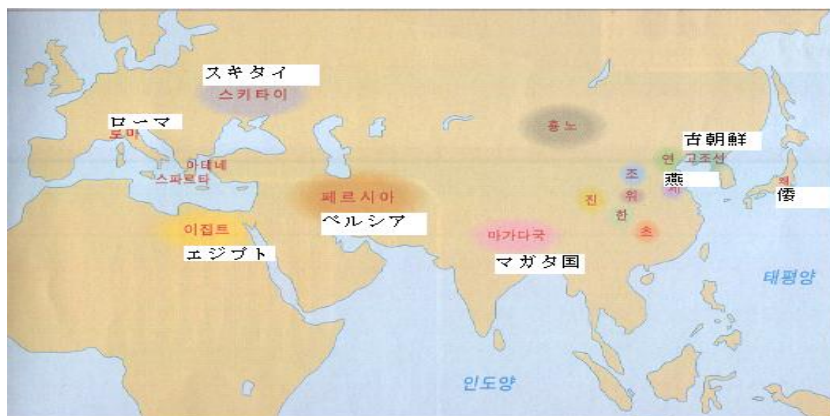
次に中学校の「国史」教科書をみることにする。中学校の「国史」教科書も、やはり国史編纂委員会・国定図書編纂委員会によって編纂された国定教科書『中学校 国史』³⁴⁾の一冊だけである。

まず、第1章「我が国の歴史の始まり」において、最初に次の図²³⁵⁾が掲載される。

32) 「우리 조상들은 유구한 역사를 거치면서 슬기를 발휘하고 노력을 기울여 문화를 발전시켜 왔다. 우리 문화는 다른 어느 민족의 그것과도 구별되는 특수성을 지니고 있으면서도 보편적 가치를 추구해 온 문화이다. 선사 시대에는 아시아의 북방 문화와 연계되는 문화를 이룩하였고, 그 후 중국 문화와 깊은 연관을 맺으면서 독자적인 고대 문화를 발전시켰다. (國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部科學省) p.14)

33) 「민족주의는 일반적으로 민족의 생활·전통·문화를 보존하여 국민 국가를 형성하고, 국가의 성립 후에는 그 독립성·통일성을 유지 발전시킬 것을 추구하는 사상이나 움직임을 일컫는다. (國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部科學省) p.15)

【圖2 紀元5世紀前後の世界】



ここに、古朝鮮をB.C.5世紀の東アジアの国家の一つとして、世界の古代有数の国と並び表わす。『高等学校 国史』のいう「悠久の歴史をもつ単一民族国家」と「民族の特殊性」を示すのである。この根拠として、第1章「わが国の歴史の始まり」第1条「先史時代の生活」の「1. 旧石器時代と新石器時代の生活の様子の違い」において掲載された図336)が載せられている。

【圖3氷河期の朝鮮半島とその周辺国家】



빙기의 한반도와 그 주변

34) 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』 教育人的資源部(文部省)

35) 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』 教育人的資源部(文部省) p.7

36) 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』 教育人的資源部(文部省) p.10

これは、旧石器時代の遺跡地を示すもので、韓国が中国と旧石器時代から別々に発展してきたことを示そうとするものである。これによって、中国文化圏とは別の東方文化圏が成立していたことが納得され、韓国の歴史が中国に匹敵することが視覚的に説明される。

では、本文においてどのように記述されているのか。『中学校 国史』の第1章「わが国の歴史の始まり」の第1条「先史時代の生活」において、朝鮮半島にいつから人が住みだしたのか、つまり民族の起源について語り、続いて旧石器新石器さらに青銅器時代への変遷を遺跡遺物を示しながら説明する。しかし、第2条「国家の成立」に入ると、その記述は大きく変化する。最初の項目「古朝鮮建国の歴史的意義は」において「檀君の古朝鮮」と「古朝鮮の成長と変遷」という題目下で、本文に檀君の古朝鮮建国を記載する。その内容は、次の通りである。

【檀君の古朝鮮建国】

青銅器文化が形成され、満州遼寧地方と朝鮮半島西北地方には族長が支配する部族があらわれ始めた。檀君はこれらの部族を統合し、古朝鮮を建国した。

檀君の古朝鮮の建国はわが国の歴史が非常に古いことを物語ってくれる。また、檀君の建国事実と弘益人間の建国理念は、我が民族が危機に面するたびに民族の自負心を呼び起こしてくれる原動力となった。

それ以外にも檀君の建国の話を通して我が民族が始めて国を作った時の状況が推測できる。熊と虎が登場することから先史時代に形成された特定の動物を崇拝する信仰の要素が反映されていることが分かる。また、雨風雲を主管する人がいたことから、我が民族最初の国家が農耕を背景にして成立していたことが推測できる³⁷⁾。

この中で「檀君の古朝鮮の建国はわが国の歴史が非常に古いことを物語ってくれる」の文章は、最初から檀君が歴史的事実であることを前提とする。その根拠として、本文の下の註に『三国遺事』古朝鮮条の現代訳が「檀君の建国」という題目で載せられている。その内容は、

37) 「단군의 고조선 건국 청동기 문화가 형성되면서 만주 요령(遼寧) 지방과 한반도 서북 지방에는 족장(군장)이 다스리는 많은 부족들이 나타났다. 단군은 이러한 부족들을 통합하여 고조선을 건국하였다.

단군의 고조선 건국은 우리나라의 역사가 매우 오래 되었음을 말해 준다. 또, 단군의 건국 사실과 홍익인간의 건국이념은 우리 민족이 어려움을 당할 때마다 자긍심을 일깨워 주는 원동력이 되었다.

그 밖에도 단군의 건국 이야기를 통해서 우리 민족이 처음 나라를 세웠을 때의 상황을 짐작해 볼 수 있다. 곰과 호랑이가 등장하는 것에서는 선사 시대에 형성되었던 특정 동물을 숭배하는 신앙의 요소가 반영되어 있음을 알 수 있다. 또, 비, 바람, 구름을 주관하는 사람이 있었다는 것에서는 우리 민족 최초의 국가가 농경 사회를 배경으로 성립되었다는 것을 짐작할 수 있다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』 教育人的資源部 p.18)

檀君の建国

昔、桓因の息子桓雄が国を治めたく人間世上をいつも見下ろしていた。桓因が息子の志を知り、地上世界を見下ろすに太白山地域が、人間に大きな助けを与えられる〔弘益人間〕ようだったので、ここに天符印三個を与えて送りその場所を治めさせた。桓雄は部下三千人を引き連れ太白山頂上にある神檀樹の下に降り、そこを神市と呼び、自ら桓雄天王と称した。彼は風を主管する者、雨を主管する者、雲を主管する者に、農事と生命、疾病、刑罰と善悪を担当させ、人間生活に関する360余の事を治めさせ、政治と教化を施した。

その時ちょうど熊一匹と虎一匹がいて、同じ洞穴に住みながらいつも神霊な桓雄に人になれるように祈った。桓雄は靈験あるよもぎ一握りとニンニク二十の粒を与えながら「お前たちがこれを食べて、百日の間日の光を見なければ人になることができよう」と言った。

熊と虎はこれを食べながら洞窟生活を始めた。熊は三七日(21日)間よく我慢して耐えて女の身が変わったが、虎はこれを堪えることができずに飛び出して人になることができなかった。女人になった熊は婚姻する対象がなかったので、常に神檀樹の下で子供を生むようにしてくれと祈った。これを見た桓雄がしばらく人間に姿を変えて熊女と婚姻して息子を生んだ。その名前を檀君王儉と言った。(『三国遺事』)³⁸⁾

と、記載する。これは、一見『三国遺事』を忠実に現代語訳したようであるが、桓雄が「政治と教化を施した」と、桓雄が人間社会を統治し、そしてそれを檀君が継承するように書かれている。しかし、桓雄が政治的に人間社会を統治したとするのは、『三国遺事』にはない。

さらに、この『中学校 国史』の特徴として、本文に、

檀君の建国事実と弘益人間の建国理念は、我が民族が危機に面するたび民族の自

38) 「**단군의 건국** : 옛날에 환인의 아들 환웅이 나라를 다스리고 싶어하여 인간 세상을 자주 내려다보았다. 환인이 아들의 뜻을 알고 지상 세계를 두루 내려다보니 태백산 지역이 인간들에게 큰 도움을 줌 [弘益人間] 직한지라, 이에 천부인 세 개를 주어 보내 그 곳을 다스리게 하였다. 환웅은 무리 3천 명을 이끌고 태백산 꼭대기 신단수 아래로 내려와, 그 곳을 신시(神市)라 부르고, 스스로를 환웅 천왕이라 하였다. 그는 바람을 주관하는 어른, 비를 주관하는 어른, 구름을 다스리는 어른 들에게 농사와 생명, 질병, 형벌과 선악을 맡게 하고, 인간살이에 관한 360여 가지 일을 다스리게 하여 정치와 교화를 베풀었다.

그 때 마침 꿈 한 마리 와 범 한 마리가 있어, 같은 굴에 살면서 항상 신령스러운 환웅에게 사람이 되기를 빌었다. 환웅은 영험 있는 쑥 한 자루와 마늘 스무 톨을 주면서 “너희들이 이것을 먹고 백 날 동안 햇빛을 보지 않으면 사람이 될 수 있으리라.” 하였다.

곰과 범은 이것을 먹으면서 동굴 생활을 시작하였다. 곰은 삼칠일(21일) 동안 잘 참고 견디어 여자의 몸으로 변했지만, 범은 이를 참지 못하고 뛰쳐나가 사람이 되지 못하였다. 여인이 된 곰(웅녀)은 혼인할 대상이 없었으므로 늘 신단수 아래에서 아이를 낳게 해 달라고 빌었다. 이를 본 환웅이 잠시 인간으로 모습을 바꾸어 그와 혼인하여 아들을 낳으니, 그 이름을 단군 왕검이라 하였다. 『삼국유사』 (國史編纂委員會·國定圖書編纂委員會(2004) 『中學校 國史』 教育人的資源部 p.18)

負心を呼び起こしてくれる原動力となった³⁹⁾

という個所がある。ここに記された「弘益人間」は、『三国遺事』において、桓雄が天から地上へ降りてくる理由である⁴⁰⁾。この「弘益人間」が、韓国の教育基本法第1条に教育理念として明示されている。

教育は弘益人間の理念のもとに全ての国民をして人格を完成さしめ、自主的生活能力と公民としての資質を具有させ民族国家の発展に奉仕さしめ、人類共栄の理想実現に寄与し得ることを目的とする⁴¹⁾。

である。

「弘益人間」を最初に教育理念として採択したのは、1946年米軍政によって委託された朝鮮教育理念審議会で、これは、1949年に新政府出発と共に制定された教育法に採り入れられた。⁴²⁾⁴³⁾この「弘益人間」教育理念が檀君の古朝鮮建国当時から今日まで韓民族の精神的支柱であったかのように装われている。

しかし、『三国遺事』の「弘益人間」の意味は、本論文第一章で明らかにしたように、「仏教の教化によって人間に利益をもたらす」である。また、金香淑氏は「弘益人間は、釈尊誕生物語に表われた此生利益一切人天⁴⁴⁾という理念と一致する」⁴⁵⁾と指摘し

39) 「단군의 건국 사실과 홍익인간의 건국이념은 우리 민족이 어려움을 당할 때마다 자긍심을 일깨워 주는 원동력이 되었다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』 教育人的資源部(文部科學省) p.18)

40) 『三国遺事』卷第一 紀異第一 古朝鮮條「下視三危太伯可以弘益人間」

41) 「교육은 홍익인간의 이념 아내 모든 국민으로 하여금 인격을 완성하고 자주적 생활능력과 공민으로서의 자질을 구유하게 하여 민족국가 발전에 봉사하며, 인류공영의 이상실현에 기여하게 함을 목적으로 한다」 文教法定編纂會(1988『文教法定』 教學社 p.14)

42) 白樂濬『韓國の現實と理念』東亞出版社 1963年 p.p.93~94

43) しかし、權聖雅氏が「新生国家の教育理念としていろいろ探している内に、教育理念分科の委員の一人だった白樂濬がたまたま提案して取り上げられたものである」(權聖雅「『弘益人間』理念の教育的意義」『韓國思想論文撰集』202 図書出版晝韓文化社 2002年 5月 p.34)と指摘するように、韓国人の教育理念としての「弘益人間」の出発点は解放後といえる。にもかかわらず、「歴史教科書」本文の「檀君の建国事実と弘益人間の建国理念は」と、それに続く「我が民族が危機に面するたび民族の自負心を呼び起こしてくれる原動力となった」という部分とが合せ記されている。

44) これは、釈迦が右脇より生まれて、自ら七歩を歩き、その右手を挙げて述べた「我於一切天人之中最尊最勝。無量生死。於今尽矣。此生利益一切人天：我一切の天人の中に於て最尊最勝なり、無量の生死、今に於て尽きたり、此生に一切の人天を利益せん」の一部分である。(求那跋陀羅訳「過去現在因果経」『大正新脩大藏経』第五十一卷 大正新脩大藏経刊行会 1925年 p.625)

45) 金香淑「朝鮮神話の源流一『ハリ公主神話』と『ダンクン神話』を巡って」2002年度 東京大学大学院比

た。明らかに現在の「弘益人間」教育理念とは異なる。

さらに、古朝鮮が近世の朝鮮王朝に引き継がれていると、『中学校 国史』第5章「朝鮮の成立と発展」第1条「朝鮮の成立」の最初の項「1. 朝鮮を建てた人たちの国家運営方向は？」に載せられた「新しい王朝は古朝鮮を継承したという意味から名前を朝鮮と言ひ⁴⁶⁾」という記事によって示されている。つまり、檀君の古朝鮮建国の史実化のため押しともいえるとともに、古朝鮮から一貫して一つの民族によって国家が継承されたことを主張するものである。

朴光用氏は「『帝王韻紀』において、檀君が檀樹神の子であることから、朝鮮王朝の姓氏である李をして『木子為王：木(檀樹神)の息子が王になる』と、李(木子=李)が王になるという予言である」と注目し⁴⁷⁾、そして「朝鮮は、太祖三年(1394)に鄭道伝(1342~1398)によって編纂された『朝鮮経国典』において、檀君朝鮮→箕子朝鮮→衛滿朝鮮へと受け継がれた三朝鮮に立脚した国号であると提示されている」と主張した。⁴⁸⁾これは、太祖3年(1394年)に鄭道伝(1342~1398)によって編纂された『朝鮮経国典上』「国号」⁴⁹⁾の記事をさしてのことである。しかし、内容を詳しく見れば、

海東之國不一其號。爲朝鮮者三。曰檀君曰箕子曰衛滿。若朴氏昔氏金氏相繼稱新羅。溫祚稱百濟於前。甄萱稱百濟於後。又高朱蒙稱高句麗。弓裔稱後高麗。王氏代弓裔。仍襲高麗之號。皆竊據一隅。不受中國之命。自立名號。互相侵奪。雖有所稱。何足取哉。惟箕子受周武之命。封朝鮮侯。今天子命曰惟朝鮮之稱美。且其來遠矣。可以本其名而祖之。體天牧民。永昌後嗣。蓋以武王之命箕子者。命殿下。⁵⁰⁾

較文化 博士論文 p.p.94~102

46) 「새 왕조를 세운 세력은 고조선을 계승한다는 뜻에서 나라 이름을 ‘조선’ 이라 하고」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中学校 国史』教育人的資源部(文部科學省) p.127)

47) 朴光用「檀君認識の歴史的変遷」『檀君—その理解と材料』ソウル大學校出版部 1994年10月 p.159

48) 朴光用「檀君認識の歴史的変遷」『檀君—その理解と材料』ソウル大學校出版部 1994年10月 p.159

49) 『三峯集』卷七 朝鮮経国典上 國号「海東之國。不一其號。爲朝鮮者三。曰檀君曰箕子曰衛滿。若朴氏昔氏金氏相繼稱新羅。溫祚稱百濟於前。甄萱稱百濟於後。又高朱蒙稱高句麗。弓裔稱後高麗。王氏代弓裔。仍襲高麗之號。皆竊據一隅。不受中國之命。自立名號。互相侵奪。雖有所稱。何足取哉。惟箕子受周武之命。封朝鮮侯。今天子命曰惟朝鮮之稱美。且其來遠矣。可以本其名而祖之。體天牧民。永昌後嗣。蓋以武王之命箕子者。命殿下。名既正矣。言既順矣。箕子陳武王以洪範。推衍其義。作八條之教。施之國中。政化盛行。風俗至美。朝鮮之名。聞於天下後世者如此。今既襲朝鮮之美號。則箕子之善政亦在所當講焉。嗚呼。天子之德無愧於周武。殿下之德亦豈有愧於箕子哉。將見洪範之學。八條之教。復行於今日也。孔子曰。吾其爲東周乎。豈欺我哉。」

50) 『三峯集』卷七 朝鮮経国典上 國号「海東之國。不一其號。爲朝鮮者三。曰檀君曰箕子曰衛滿。若朴氏昔氏金氏相繼稱新羅。溫祚稱百濟於前。甄萱稱百濟於後。又高朱蒙稱高句麗。弓裔稱後高麗。王氏代弓裔。仍襲高麗之號。皆竊據一隅。不受中國之命。自立名號。互相侵奪。雖有所稱。何足取哉。惟箕子

(現代語訳)海東の国はその国号が一定しなかった。朝鮮と呼ばれたのは三回だったが、曰く檀君朝鮮、曰く箕子朝鮮、曰く衛滿朝鮮である。朴氏・昔氏・金氏が互いに引き継いで新羅と称えた。温祚は先立って百済と称え、甄萱は後に百済と称えた。また高朱蒙は高句麗と称え、弓裔は後に高麗と称えた。王氏は弓裔の代わりをして高麗という国号をそのまま使った。これらは皆一地域を密かに占め、中国の命令を受けずに自ら国号を立ててお互いを侵奪したから、たとえ(国号を)称したとしても、何の意味があったというのか。ただ箕子だけは周武王の命を受けて、朝鮮侯に封ぜられた。今、天子(明太祖)が命じて曰く「ただ、朝鮮という称号が美しいだけでなく、その由来が久しい。この名をそのまま使用して天に従い人民を治めれば、後孫が永く栄えるだろう」。思うに周武王が箕子に命じたのを以て、殿下に命じたのである。

と、「惟箕子受周武之命。封朝鮮侯」「蓋以武王之命箕子者。命殿下箕子朝鮮」とあるように、箕子朝鮮を継ぐものとして明の太祖が命じたものを受け入れ朝鮮王朝としたのであって、古朝鮮を継ぐものとして朝鮮という国号を定めたのではない。

また、朝鮮王朝建国時に特に支配層において、朝鮮王朝が古朝鮮を継承した国家だとの認識はなく、箕子を継ぐという認識が強かった。本論文第二章で述べたように、文宗9年(1055)に契丹に送った国書に

当国襲箕子之国。(『高麗史』文宗条)⁵¹⁾

(現代語訳) 我が国は箕子の国を継承した。

仁宗6年(1122)に高麗に来た徐兢(1091～1153)も

高麗之先。蓋周武王封箕子胥餘於朝鮮。(『高麗圖經』)⁵²⁾

(現代語訳) 高麗の先祖は、思うに周武王が朝鮮に封じた箕子で、名は胥余だ。

と、高麗が継承したのは箕子朝鮮と明確に示されている。また、当時の檀君に対する認識として、徐永大氏は檀君の認識は平壤の祖でしかなかったと指摘した。⁵³⁾さらに、檀君が

受周武之命。封朝鮮侯。今天子命曰惟朝鮮之稱美。且其來遠矣。可以本其名而祖之。體天牧民。永昌後嗣。蓋以武王之命箕子者。命殿下。名既正矣。言既順矣。箕子陳武王以洪範。推衍其義。作八條之教。施之國中。政化盛行。風俗至美。朝鮮之名。聞於天下後世者如此。今既襲朝鮮之美號。則箕子之善政亦在所當講焉。嗚呼。天子之德無愧於周武。殿下之德亦豈有愧於箕子哉。將見洪範之學。八條之教。復行於今日也。孔子曰。吾其爲東周乎。豈欺我哉」。

51) 『高麗史』卷7 世家 卷7 文宗1 9年7月

52) 『高麗圖經』卷1 建國 始封(『高麗圖經』亞細亞文化社 1972年 4月)

国家祭祀として祀られたのは、太宗12年(1412)で、朝鮮王朝建国(1392年)から既に20年経ってのことである。しかも、箕子祠においての合祀でなく、檀君祠堂が建立されたのは世宗7年(1425)であった。54)教科書の本文の「新しい王朝は古朝鮮を継承したという意味から名前を朝鮮と言い55)」は、作り出されたものに他ならない。

また、三朝鮮説は朴光用氏が説くように『朝鮮経国典上』 「国号」に最初に見られるが、これは権近の『東国史略』(1403年)、権擘『応製詩註』(1457年)、盧思慎の『三国史略』(1476年)などによって15世紀に定着したものである。これらの書は全て国の始まりを檀君朝鮮としたことから、朝鮮建国後に古朝鮮の継承とする考えが生まれそれが定着したといえる。

4. おわりに

檀君を史実化する研究が現在も盛んであることは、2002年10月3日北朝鮮の平壤で、南北共同で始めて開催された「檀君と古朝鮮に関する共同学術討論会」の内容をみれば理解できる。この学術討論会の南の主催は檀君研究を主導してきた「檀君学会」、北は国家の団体である「歴史学会」であった。その時出された「檀君と古朝鮮に関する南北歴史学者達の共同学術討論会共同報道文」56)を紹介すると、下記の通りである。

- 一、檀君は実際の歴史的な人物で、我が民族の最初の国家である檀君朝鮮を建てた建国始祖である。
- 二、我が民族は悠久の歴史を持つ檀君民族で、我々は『三国遺事』を始めとする多くの史書に古朝鮮の中心地を平壤であったとする記録を重視する。
- 三、古朝鮮は、今日の朝鮮半島と東北アジアの広い地域を基本領域とした強大な国家であった。
- 四、北と南の歴史学者達は、半万年の悠久の歴史を輝かした優秀な民族性を固守するため学術的友帯を強化し、協調して共同研究を活発にする。
- 五、北と南の歴史学者達は、民族の使命感を深く心に刻み、南北歴史学者達の連帯を強化し、愛国愛族の立場をから民族史研究をより深化させ、民族が力を合わ

53)徐永大「伝統時代の檀君の認識」『檀君と古朝鮮史』四季節出版社 2000年3月 p.166

54)徐永大「伝統時代の檀君の認識」『檀君と古朝鮮史』四季節出版社 2000年3月 p.171

55)「새 왕조를 세운 세력은 고조선을 계승한다는 뜻에서 나라 이름을 ‘조선’ 이라 하고」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部(文部科學省) p.127)

56)檀君學會編『(南北學者達が一緒に書いた檀君과 古朝鮮 研究』知識産業社 2005年10月

せ祖国統一の偉業に積極的に尽くしていこう。

北側 歴史学会、南側 檀君学会

2002年 10月 3日

平壤

以上がその内容である。とりわけ五の「民族の使命感を深く心に刻み、(略)愛国愛族の立場をから民族史研究をより深化させ、民族が力を合わせ祖国統一の偉業に積極的に尽くしていこう」は、イデオロギーである。これが今も生きる「檀君」なのである。

李基白は、「檀君神話を語るとき、韓国人はいささか複雑な感情に包まれるのではないかと思う。まず、それを韓国民族の建国神話と信じているだけに、民族ともにうやうやしくたてまつり、胸の内にしまっておくものとする。しかし、一方、今日の常識に照らしてみると、文字通りに信じることのできないこの神話は、結局、否定するしかない無価値なものではないか、という考えもいなくよくなる。この合い矛盾する感情は、望ましい形には処理されずに、韓国人の心のなかに混在する機会が多いようである⁵⁷⁾」と述べている。これは、現在の韓国人の「檀君」観を如実に語ったものである。日本人が天照大神や神武天皇を考えるように、檀君は学問以前の問題として心情的な所が多々ある。そして、かつて独立運動を闘うかのように檀君擁護の研究に身命を捧げてきた民族主義史学者たちを考えると、現在も古代史研究家は檀君に対して心情的に自由にはなれないであろう。

しかし、そうである限り、「檀君」の呪縛からは解放されないであろう。改めて、『三国遺事』の「檀君神話」は、仏教に潤色されたのではなく、仏教によって成り立つもので、かつそこに民族の祖「檀君」は存在しないことを見定めたい。

神野志隆光氏は『古事記』と『日本書紀』について語り、「『古事記』『日本書紀』がそのまま意味をもち続けたというのではない。意味を更新して生き続けたのである。解釈を加えながら、その時々にあらたに意味を引き出してきた⁵⁸⁾」と述べている。

『三国遺事』も然り、こと中世にだけ終わるのではなく、後世そして現在もその意味は更新され引き継がれてきた。元に侵略され国家の存亡の危機に自分達の存在を保障するものとして、壬辰倭亂(文禄の役)と丙子胡亂(清の侵略)期において国を守る精神的礎として、日本植民地時代に独立運動の心の支えとして、『三国遺事』檀君があった。そして、現在の南北統一のイデオロギーとして『三国遺事』檀君がある。現在の『高等学校 国史』の「悠久の歴史を持つ単一民族国家」もまた、『三国遺事』の再創造に他ならない。それを見届けなければ、間違ったナショナリズムを高揚する道具として利用されるだけである。

57) 李基白著; 泊勝美譯『韓國古代史論』學生社 1976年9月 p.16

58) 神野志隆光『古事記と日本書紀』講談社現代新書 1999年1月 p.3

【參考文獻】

一次資料(テキスト・仏典・中国書籍)

- ・姜仁求・外『註釈三国遺事』Ⅰ(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年11月
- ・姜仁求・外『註釈三国遺事』Ⅱ(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年11月
- ・姜仁求・外『註釈三国遺事』Ⅲ(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年6月
- ・姜仁求・外『註釈三国遺事』Ⅳ(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年11月
- ・姜仁求・外『註釈三国遺事』Ⅴ(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年6月
- ・金鍾權訳『完訳原文 三国史記』 明文堂 1993年1月(1984年6月)
- ・国史編纂委員会・国定図書編纂委員会編『中学校 国史』 教育人的資源部(文部科学省) 2004年3月(2002年3月)
- ・国史編纂委員会・国定図書編纂委員会編『高等学校 国史』 教育人的資源部(文部科学省) 2004年3月(2002年3月)
- ・文教法定編纂会『文教法定』 教学社 1988年
- ・国史編纂委員会・国定図書編纂委員会編『高等学校教師用指導書 国史』 教育人的資源部(文部科学省) 2007年3月(2002年3月)
- ・金慶洙譯『帝王韻紀』 図書出版 1999年

研究書(単行本)

- ・『檀君一その理解と材料』 ソウル大學校出版部 1994年10月
- ・『韓國史學史の研究』 乙酉文化社1985年
- ・李恩峰『檀君神話研究』 オンヌリ(온누리)1986年3月
- ・李基東・李基白『韓國史講座1 古代篇』 一潮閣 2001年3月
- ・宋호정『檀君 作られた神話』 図書出版산치림 2002年1月
- ・崔南善「檀君及其研究」民族文化論叢 第一冊 民族文化社 1981年
- ・民族文化推進篇『新增東國輿地勝覽』 舎出版社 1996年
- ・白樂濬『韓國の現實と理念』 東亞出版社 1963年
- ・求那跋陀羅訳「過去現在因果經」『大正新脩大藏經』 第五十一卷 大正新脩大藏經刊行会 1925年
- ・檀君學會編『南北學者達が一緒に書いた檀君と古朝鮮研究』 知識産業社2005年10月
- ・李基白著;泊勝美譯『韓國古代史論』 學生社 1976年9月
- ・神野志隆光『古事記と日本書紀』 講談社現代新書 1999年1月

要 旨

朝鮮時代末期を迎え、開化と同時に日本からの圧迫に対抗するように民族主義的歴史学が台頭した。教科書を中心とした当時の歴史叙述は、愛国主義・民族主義・独立主義の意識が強く反映され、そこに檀君を韓国史始初に登場させ、建国と民族の始祖として叙述した。ここに、民族意識を高揚すると同時に、悠久の歴史と伝統を持つという韓国史像が構築された。

これに対し日本政府は植民化政策の一貫として、韓民族の独立の象徴であった「檀君」の抹殺を図った。この時期、檀君の根拠として日本人の学者が否定した『三国遺事』が韓国において再登場し、『三国遺事』をもとに檀君の史実化への研究が民族史学者を中心としてなされた。彼らは武力行動は起こさなかったが、檀君神話研究を通して民族運動を展開した者たちと言える。当時の民族史学者たちは檀君神話を守り発展させることによって、民族の自尊心を回復させ自主独立の正統性をそこに見つけようとした。即ち、檀君を単に古朝鮮の祖として終わらせず、全韓民族の祖として独立の象徴として昇華させた。檀君は独立運動と共にイデオロギー化したのである。そして、この植民地に時代に作られたイデオロギーが、独立後も「檀君」を規制したのである。

このイデオロギーが今も韓国の歴史教科書に生きている。近現代に作られた民族の祖としての檀君、人間社会の王としての桓雄、広大な古朝鮮の領域などの朝鮮時代の認識を全て『三国遺事』によるものとして、「悠久の歴史をもつ単一民族国家」という現在の国民国家観を完成させるという間違いを犯している。こうした、問い直さなければならない国民国家観が、現在の教育現場にあるという問題を指摘しなければなるまい。

キーワード：歴史教科書、檀君、『三国遺事』、『帝王韻紀』、イデオロギー化、史実化、神話、一つの民族、古代史

투 고 : 2010. 2. 28
1차 심사 : 2010. 3. 13
2차 심사 : 2010. 3. 27